

ニュースレター

CONTENTS

- 11月の中学受験大手公開模試(速報値)について
- 東京都公立中3生の進路希望調査、まとまる
- 公立中学校からの通信制高校進学者の増加を考える
- SNニュースレターのお申し込みのご案内

発行 (株)スクールネクスト 編集 池田 亨
 〒107-0062
 東京都港区南青山2-11-14 青山コシビル6F
 TEL03-6434-0896 Fax03-6434-0897
 E-mail ikeda@schoolnext.co.jp

●11月の中学大手公開模試(速報値)について **2024年12月上旬号掲載**

(1)全体状況

模試名		四谷大塚		首都圏模試		日能研		2科4科の模試合計	
男女	年度	23年	24年	23年	24年	23年	24年	23年	24年
男子	4科	7,062	7,438	5,813	5,190	5,072	5,261	17,947	17,889
	2・3科	458	388	1,219	1,241	813	795	2,490	2,424
	計	7,520	7,826	7,032	6,431	5,885	6,056	20,437	20,313
女子	4科	5,906	6,108	5,654	5,489	5,534	5,343	17,094	16,940
	2・3科	386	408	1,831	1,850	805	813	3,022	3,071
	計	6,292	6,516	7,485	7,339	6,339	6,156	20,116	20,011
男女計		13,812	14,342	14,517	13,770	12,224	12,212	40,553	40,324
模試名		サピックス(4科)		適性検査型模試		全模試(上段組む)総合計			
男女	年度	23年	24年	23年	24年	23年	24年	増減	前年対比
男子		4,727	4,590	1,079	891	26,243	25,794	-449	-1.7%
女子		3,225	3,360	1,377	1,100	24,718	24,471	-247	-1.0%
男女計		7,952	7,950	2,456	1,991	50,961	50,265	-696	-1.4%

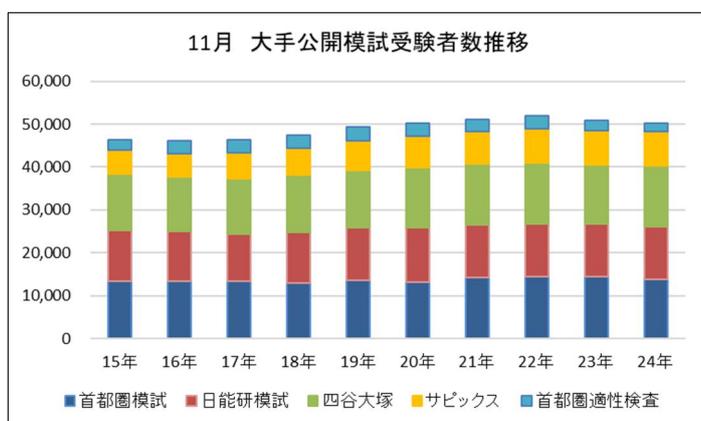
11月の大手公開模試の受験者数が、速報値ですがまとまりました。大手公開模試は、四谷大塚の合不合判定テスト、首都圏模試の統一合判、日能研模試、サピックスオープンと、首都圏模試の適性検査型です。適性検査型は速報値で、学校会場以外が最終的にもう少し増えます。5つの模試合計の受験者数は、昨年最終より696名、率では1.4%の減少です。適性検査型模試はあと少し増えますが、最終的に合計の受験者数は昨年には届かないかもしれません。

大手公開模試は4月、7月、9月～12月は毎月実施されていて、12月が最終回です。4月は昨年よりマイナス、7月はプラス、9月はマイナスでしたが台風の影響、10月は増加と推移していて、今回は再びマイナスです。すでに帰国生入試や北関東の私立中学入試が始まっていて、12月になって前項の千葉

県でも第一志望や推薦入試が始まりました。このため、例年 11 月が年間最多の受験者数になります。

模試別の状況では合不合格判定テストが 3.8%の増加です。7 月以降、前年よりも受験者数の増加が続いていますが、今回は 530 名の増加で、最大の増加人数です。一方、首都圏模試の統一合判は 5.1%減と大きく減りました。表のように女子よりも男子の減少が目立っています。統一合判については、受験界では四谷大塚のカリキュラムが早く進行するようになったため、一部の受験生が統一合判に流れているのではないかと、という見方もありますが、だとすれば、入試が近づいてカリキュラムの差が目立たなくなってきたことから、統一合判から合不合格判定テストに受験生の一部が流れているのかもしれませんが。日能研模試は男子の受験者数が少し増えて女子が減少、合計では 12 名の減少ですから昨年並みです。サピックスオープンには逆に女子が増加、男子は減少していますが、合計では 2 名の減少ですからこちらも昨年並みです。

(2) この 10 年の推移



グラフはこの 10 年間の大手公開模試の模試別受験者数の推移です。5 つの模試の合計の受験者数はグラフ左端の 2015 年には 46,442 名で、2017 年までは 4 万 6 千名前半でほぼ横ばいで推移します。2018 年から増加、毎年約 800 名～2,000 名の増加が続き、一昨年は 51,873 名になりました。しかし、昨年は母体となる小 6 児童数の減少から受験者数も減少、今年の速報値は昨年より 696 名減

っていますが、5 万名台は維持しています。

模試別では、合不合格判定テストはグラフ左端の 2015 年に 13,160 名で、2016 年、2017 年は 1 万 2 千名台に減りますが、その後は増加して 2021 年は 14,420 名に達します。昨年まで減りますが、前述のように今年は大きく増えました。日能研模試は 2015 年に 11,772 名で、2018 年まで 1 万 1 千名台が続き、2019 年からは 1 万 2 千名台が続きます。最多は 2020 年の 12,573 名ですが、安定的に推移しています。首都圏模試の統一合判は、2015 年が 13,352 名で、2020 年まで 1 万 3 千名台が続きますが、2021 年は大きく増加、昨年まで増加が続きました。しかし今年は減っています。サピックスオープンはやや減ったことがあっても全体的には増加が続いていた模試です。2015 年は 5,597 名で 2017 年まで 5 千名台、2018 年、2019 年は 6 千名台、2020 年、2021 年は 8 千名台と増加しています。昨年は 8 千名を若干ですが切っていて、今年は昨年並みでした。一番歴史が新しい適性検査型模試は、11 月の実施は 2015 年が初年度です。この時は 2,561 名の受験者数で、その後は 2019 年に 3,102 名に達しますが、適性検査自体が都県によってかなり出題に違いがあり、塾内実施で小規模な模試も多いことから、2020 年以降は減少の年もあります。本稿執筆時点ではまだ速報値ですが、前述のように最終結果でもう少し増えるでしょう。

(3) 参考・前年比で希望者の増加が目立つ学校

編集部で各模試結果を見てみました。昨年より希望者の増加が目立ったのは次の各校です。下線は志望順位が高い希望者の増加と考えられる学校、◎は 10 月に続いて今回も増加が目立った学校です。

【男子の希望】

都内男子校…◎足立学園、◎開成、◎海城、学習院、◎城北、世田谷学園、桐朋、獨協、◎日本学園、◎日大豊山、◎本郷、◎明大中野、◎立教池袋

都外男子校…鎌倉学園、慶應普通部、サレジオ学院、聖光学院、藤嶺藤沢

都内男女校…◎青山学院、郁文館、◎駒込、◎桜丘、◎実践学園、◎品川翔英、◎芝国際、淑徳、◎淑徳巣鴨、順天、多摩大目黒、◎中大附属、◎千代田、◎東京成徳大、◎東京電機大、◎日本工大駒場、◎文化学園大杉並、◎文教大付属、◎明治学院、◎明大八王子、◎明大明治、目白研心、立正大立正、◎早稲田実業

都外男女校…◎青学横浜英和、神奈川大附属、自修館、桐光学園、◎日大藤沢、◎法政大第二、◎横須賀学院、◎芝浦工大柏、◎昭和学院秀英、◎八千代松陰、流通経済大柏、開智、◎開智所沢、◎栄東、◎武南

【女子の希望】

都内女子校…◎跡見学園、江戸川女子、◎大妻、◎共立女子、◎恵泉女学園、◎光塩女子、晃華学園、◎佼成学園女子、◎実践女子、◎品川女子学院、◎十文字、◎女子聖学院、◎白百合学園、◎東京女学館、東洋英和、◎トキワ松、◎中村、富士見、◎富士見丘、◎普連土学園、◎文京学院大女子、◎三輪田学園、山脇学園、立教女学院

都外女子校…◎神奈川学園、◎鎌倉女学院、◎捜真女学校、◎横浜共立、◎国府台女子、和洋国府台、◎淑徳与野

都内男女校…◎青山学院、◎郁文館、◎穎明館、◎桜美林、◎駒込、◎桜丘、◎サレジオン国際学園、品川翔英、◎芝国際、◎淑徳巣鴨、◎順天、玉川学園、◎東京成徳大、◎東京電機大、◎東京農大第一、◎日本工大駒場、広尾学園、◎文化学園大杉並、◎明治学院、◎明大八王子、◎安田学園、立正大立正

都外男女校…◎青学横浜英和、◎日大藤沢、◎法政大第二、◎芝浦工大柏、◎昭和学院秀英、◎東邦大東邦、◎日出学園、◎麗澤、◎開智所沢、栄東、◎西武文理、武南、細田学園

11月も男子は有名大学附属の人气が目立っていますが、男子校の学校数が少ないこともあって、中堅の共学校の人気も根強いものがあります。女子にも有名大学附属人気が見られますが、中堅女子校の人気も目立っています。グローバル系や探究活動などの特色が評価されているのでしょう。ただ、共学校でもこうした活動が活発な学校は少なくありません。それでも女子校の人气が高いのは、伝統や独自の女子教育の面とともに、共学の人気校の難化が進んできた面もあると思われます。

●東京都公立中3生の進路希望調査、まとまる 2025年1月10日臨時増刊号掲載

東京都教育委員会は1月8日、公立中学校長会が12月1日に調査した、都内公立中学校3年生の進路希望状況を発表しました。

(1) 全体状況

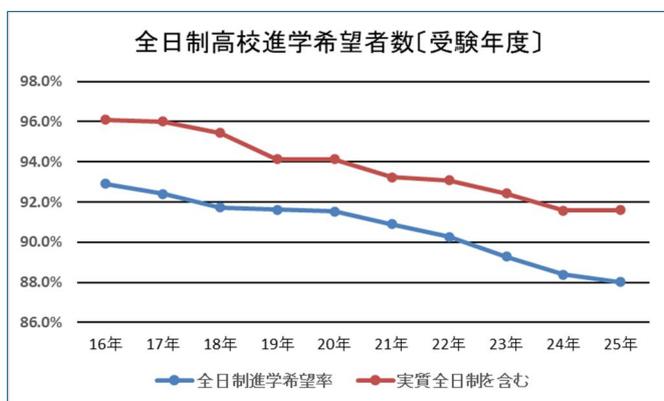
次のページの表は全体の希望状況です。卒業予定者数は前年より252名減少した77,856名です。前年まで3年連続で増えていましたが、今回は僅かですが減っています。高専を含めた全日制高校への進学希望者数は、校名未定も含めて前年より513名減少と、卒業予定者数よりも大きい減少になっています。

区分	今回人数	今回率	前年人数	前年率	人数差異	率差異
卒業予定者数	77,856	100.0%	78,108	100.0%	-252	-
都立全日制高校・高専	45,720	58.7%	49,431	63.3%	-3,711	-4.6%
全日制国立・私立・他県公立	22,548	29.0%	19,242	24.6%	3,306	4.3%
全日制志望校未定	261	0.3%	369	0.5%	-108	-0.1%
都立昼間定時制	2,429	3.1%	2,321	3.0%	108	0.1%
都立夜間定時制	456	0.6%	498	0.6%	-42	-0.1%
都立以外定時制	172	0.2%	175	0.2%	-3	0.0%
都立通信制	115	0.1%	119	0.2%	-4	0.0%
都立以外通信制	3,880	5.0%	3,675	4.7%	205	0.3%
特別支援学校	1,034	1.3%	1,017	1.3%	17	0.0%
専修・各種学校	473	0.6%	486	0.6%	-13	0.0%
就職希望者等	134	0.2%	117	0.1%	17	0.0%
その他	634	0.8%	658	0.8%	-24	0.0%

す。全日制都立高校の希望者は 45,720 名で前年より 3,711 名減少、率では 4.6%と大きく下がりました。マスコミでは、「全日制都立高校希望率が 31 年ぶりに 7 割を切った」などと報じていますが、これは「全日制高校希望者の中での都立高校希望率」で、この値では近年人気の通信制高校の希望者数が反映しませんので、ここでは他の項目も含めて「卒業予定者数の中での希望率」で考察しえます。

全日制的都立高校希望者が減って、代わって増えたのは全日制国立・私立・他県公立高校の希望者です。他県公立は転居者ですが、実際にはかなり少なく、多数を占めるのは都内・隣接県の私立高校です。近年人気の通信制は、都立通信制では目立った希望者数ではありませんが、都立以外の希望者は前年より 205 名増えた 3,880 名で、率では 5.0%と「20 人に 1 人」になりました。今年も前年より 0.3%上がっていますが、前年は 0.7%、その前は 0.5%と、それぞれ前の年より上がっていましたから、動きは少し落ち着いてきたのかもしれませんが。都立昼間定時制は、新設の立川緑高校が開校することもあって前年より 108 名増えていて、率では 3.1%です。

(2) 希望状況の推移

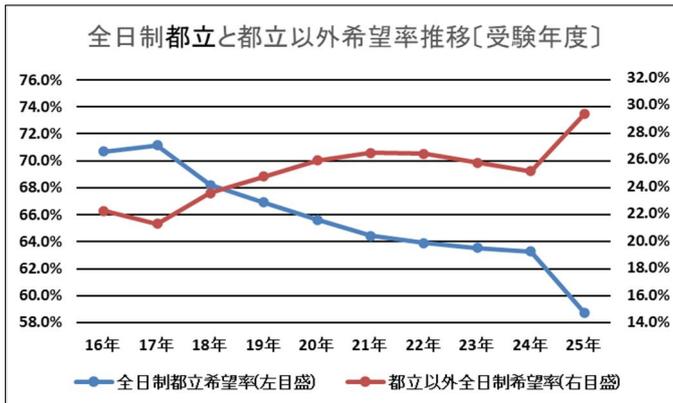


左のグラフは都立高校だけでなく、私立高校なども含めた全日制高校の進学希望率の推移です。純粋な全日制高校のみと、都立のチャレンジスクールやフレジスクールといった、「実質全日制」の昼間定時制高校を含めた推移を表しています。ただし、「実質全日制」には私立昼間定時制の中央大学などや、毎日昼間にスクーリングを行っている通信制高校は含んでいません。年度表記は受験年度で、グラフ右端の 25 年が今年です。

回です。

グラフはこの 10 年分ですが、振り返ると 2003 年には全日制的希望率が 94.9%、実質全日制を含むと 95.8%でした。全日制はグラフ左端の 2016 年には 92.9%に低下、その後もグラフのように低下が続き、

今回は88.0%に下がりました。実質全日制を含むと2016年は96.1%で、以後前年並みの年もありましたが、やはり下降傾向で、今年も前述の立川緑の開校もあって前年同様の91.6%です。



左のグラフは全日制の都立高校と全日制の都立以外(国立・私立・他県公立、校名未定)の高校に分けた希望状況の推移です。「実質全日制」は含んでいません。上記のように都立以外はほとんどが都内・隣接県の私立高校です。都立高校の希望率は2018年に大きく下がり、その後も下がり続けました。ただ、2023年や2024年は、それ以前よりもグラフの傾きが緩やかになってきて、特に2024年は2023年よりも0.2%

しか希望率が下がっていないことから、都立高校離れも落ち着いてきたかと思われました。しかし、今回は2018年を上回る大幅な希望率の低下です。

都立以外の希望率は右目盛です。グラフを見ればわかるように、都立とは逆の動きです。都立高校の人気低下は「全日制私国立高校の人気によるもの」であることがわかります。今年の29.3%は、編集部に残る範囲では2005年の28.0%を上回る高さです。2005年ごろは私立高校の人気が高く、25~27%台の年が多く見られましたが、都立高校が人気回復で改革を進めたことや、不景気もあって2009年以降私立高校人気に陰りが出て、都立高校の人気が上がってきました。しかし、2013年をピークに都立高校の人気が下がり始め、グラフのような推移になったわけです。今回は私立高校が2005年ごろの人気に戻ってきたと言えます。ただし、2022年~2024年をよく見ると、都立高校の希望率も、都立以外の希望率も下がっています。全日制高校離れのため、通信制に生徒が向かったことが原因です。ですから、今後も全日制私立高校が今年並みの人気を維持していくかどうかは、通信制との人気の競い合いしだいになるでしょう。

(3) 人気の高い都立高校

25年			24年		
1	豊島	2.19	1	豊島	2.37
2	神代	1.953	2	新宿	2.27
3	駒場	1.946	3	本所	2.14
4	石神井	1.884	4	城東	2.011
5	立川	1.880	5	三田	2.008
6	上野	1.81	6	広尾	1.92
7	三田	1.789	7	神代	1.89
8	豊多摩	1.788	8	芦花	1.85
9	戸山	1.78	9	石神井	1.83
10	小岩	1.77	10	竹早	1.81

表は前年と今年の、単位制も含めた都立高校普通科の希望倍率トップ10です。コース制や海外帰国生などの特別枠は含んでいません。トップは今年も前年と同じ豊島です。希望倍率は少し下がりました。2位は神代、3位は駒場で、両校とも東京都教育委員会の発表では1.95倍ですが、表のように小数第3位で差がつきますので、ここでは神代を2位、駒場を3位としています。神代は昨年の7位から上がり、希望倍率も少し上がっています。駒場は、前年は表に登場していません。東京都では前々年までは学年制普通科各校が男女別定員で、その時は進路希望調査も男女別で集計されていました。駒場は男女

別だった2014年に男子が3位だった学校です。今年は男女合計でも高い人気です。4位の石神井は前年の9位から上昇、希望倍率も少し上がりました。5位の立川も前年は表に登場していません。多摩地区

の進学指導重点校ですが、入試問題が独自問題ですから、どうしても固定人気になりがちで、こうしたランキングで5位になるのは珍しいことです。

6位の上野は前年が1.66倍でしたから今年は人気が目立ちます。以前も男子の2016年で5位になっています。7位の三田は前年の5位から下がりました。2021年には男女とも希望倍率トップで、その後敬遠傾向が見られました。人気は一段落していますがそれでも高い希望倍率です。8位の豊多摩は、2017年、2018年の男子でそれぞれ3位と5位に登場していますが、そのときは2倍を超える希望倍率でした。今回はそこまでの水準ではありませんが、前年よりも希望倍率が上がっています。9位の戸山は進学指導重点校で独自問題ですから、立川と同様、固定人気の学校ですが、都心部に位置していますから、近年は男子の希望倍率でトップになったり、2位が3年連続したりと、高い人気が続いています。今年は希望者が増えています。10位の小岩も前年は登場していませんが、男女別だった2023年は女子の5位でした。隔年的な変化で前年は希望倍率が下がりましたが、今年は再び上がってきました。

25年				24年			
1	園芸	動物	2.17	1	工芸	デザイン	2.37
2	立川	創造理数	2.05	2	農業	都市園芸	2.11
3	工芸	デザイン	2.03	3	工芸	グラフィックアーツ	2.09
4	農業	食品科学	1.97	4	赤羽北桜	調理	1.86
5	総合芸術	美術	1.85	4	園芸	動物	1.86
6	瑞穂農芸	畜産科学	1.74	6	国際	一般生徒	1.80
7	工芸	グラフィックアーツ	1.71	6	総合芸術	美術	1.80
8	駒場	保健体育	1.68	8	晴海総合	総合学科	1.76
9	国際	一般生徒	1.51	9	八王子桑志	システム情報	1.63
10	工芸	インテリア	1.49	10	総合芸術	舞台表現	1.50
				10	駒場	保健体育	1.50

コース制や専門学科などでは、前年はトップ10で多くの同倍率が多く見られました。今年は同倍率がありません。コース制や専門学科などでは募集定員が小さい課程も多く、ちょっとした希望者数の変化で希望倍率が大きく変わりますので、簡単な紹介にとどめます。

今年のトップの園芸・動物や、3位の工芸・デザイン、5位の総合芸術・美術、9位の

の国際・一般生徒といった、全都で1つだけの課程がほぼ毎年上位に来ています。

募集定員の規模が大きい、全日制の通常の普通科(単位制を含み、島しょ部やコース制、海外帰国生枠などを除く)と総合学科について、学校ごとの希望者数の増減を調べてみると、前年はその前の年の進路希望調査と比べて希望者数が10%以上増えたのが日比谷や狛江など34校、逆に10%以上減ったのが町田や板橋有徳など33校で、学校数はほぼ拮抗していました。それが今回は10%以上増えたのが戸山や東久留米総合など14校、10%以上減ったのは新宿や日野台など60校で、減った学校がずっと多くなっています。減った学校の顔ぶれを見ると、進学指導重点校と、かなり入りやすい学校はあまり変わらないものの、その間は全都的に幅広い学力層で減少校が見られます。また、前年は35校が進路希望調査で希望者が定員に達しない定員割れでしたが、今回は41校に増加、しかも前年の35校のうち28校が今回も定員割れを起こしています。

今回はあくまでも進路希望調査で、第一志望校の調査ですから、入試結果ではありませんし、都立高校の人気低下は入試後に改めて総括する必要がありますが、現時点で次のようなことが理由として考えられます。

- ・今年度から、国の就学支援金に上乗せする都の独自の学費支援制度の年収制限(標準世帯で910万円)

が撤廃されたこと→海外留学などの経費を考えたとき、年収910万円を超えていても高校ではあまりお金を使いたくないが、海外留学に条件のよい私立高校は学費が高く困っていた。それが、制限が撤廃されたことで積極的によりよい私立高校を選ぶ環境ができた。

- ・安全、早期決定志向が高まっていて、都立高校入試よりも早く合格が決まる私立高校、特に1月22日からの推薦入試に受験生が流れている。
- ・今年の高校受験生は2020年、2021年のコロナ禍で塾通いを見合わせて、中学受験を断念した生徒たちが多かった→ぜひとも高校から入学できる私立中高一貫校で、中学受験で入学した生徒たちに追いつきたい。
- ・前年の2024年度入試では、新学習指導要領完全実施1年目で、評価方法の変更から思ったほどの調査書の評定(いわゆる内申)が伸びなかった受験生が目立っていて、その状況を見ていた1年後輩にあたる今年の受験生に、合格可能性が計算しにくい都立高校入試に対する不安感や不信感が大きくなった。
- ・都立高校の不人気校が増加している中で、「毎年不人気」の学校が固まってきて、希望の都立高校が成績的に難しい場合、難度面で手が届きそうな別の都立高校が不人気校だと、これを避けて私立高校を選ぶ動きが広がっている。

これらのどれか一つ、ということではなく、複合的な要因だと考えられますが、東京都の動きは隣接各県、首都圏全域に伝播していきますから、入試が終わった時点で改めて検証する必要があるでしょう。

●公立中学校からの通信制高校進学者の増加を考える 2024年11月下旬号掲載

ニュースレター前号では、首都圏各都県のトップを切って発表された、埼玉県の公立中学3年生の進路希望調査結果を取り上げましたが、その中で通信制高校進学希望者が3,000名を超えたことをお伝えしました。通信制の増加がどのように進んでいるのか、都県ごとに違いがあるのか、考えてみます。

(1) 通信制高校の全体規模

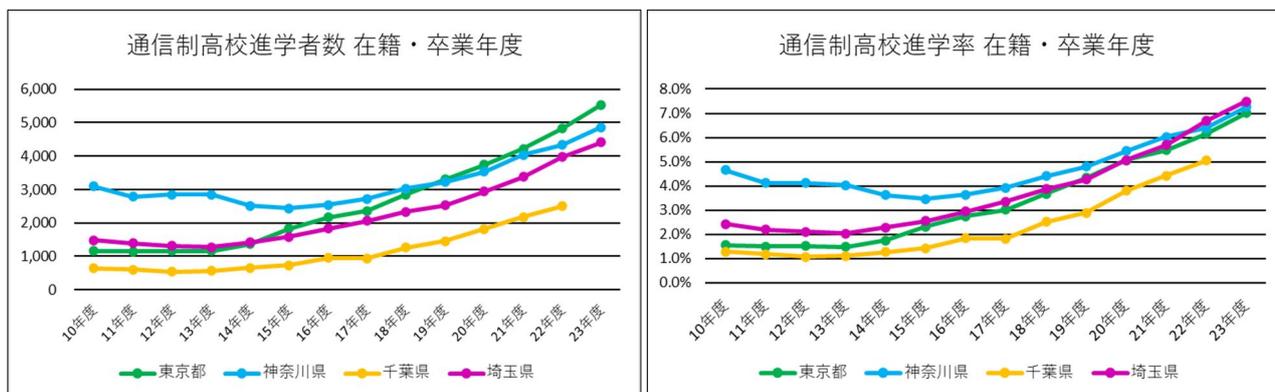
通信制高校は、今年度の学校基本調査の速報値によると全国で303校(休校中含む)、在籍生徒数29万118名になっています。在籍生徒数が1万名以上の都道府県は北海道、茨城県、千葉県、東京都、愛知県、大阪府、奈良県、鹿児島県、沖縄県で、人口が多い都道府県もありますが、全国最多は茨城県の35,223名、次が北海道の26,615名、3番目が沖縄県の21,550名と、人口が多いから通信制高校の生徒数が多いとは言えません。ご存じだと思いますが、通信制には狭域(通学範囲が設置されている都道府県と隣接する1つの都道府県に限定)と広域(通学範囲は3つ以上の都道府県)に分かれていて、公立は基本的に狭域、私立は広域が多くなっています。茨城県や北海道、沖縄県の生徒数が多いのは、生徒数が多い広域の私立通信制高校があるからです。広域通信制の代表格はN高校ですが、グループのS高校、2025年度開校予定のR高校と合わせて全国に97のキャンパス(2024年11月時点、キャンパスと言っても基本的にはビルのテナント)を構えています。通信制高校は日常の学習を、在宅や、必要ならば自宅最寄りのキャンパスで行い、年数回(科目によって異なる)のスクーリングで本校に行くことになりませんが、スクーリングに通うことができるなら、在籍する高校が遠方でも構わないわけです。N高校のグループの本校はN高校が沖縄県、S高校は茨城県、R高校は群馬県にあって、スクーリングは宿泊が原則、他にスクーリング会場を埼玉県、愛知県、大阪府、福岡県などに設置しています。

(2) 通信制高校の生徒数の増加

種別	年度	学校数		在籍生徒数	
		2010年度	2024年度	2010年度	2024年度
通信制	全国	209	303	187,538	290,118
	1都3県	37	45	37,249	40,932
定時制	全国	184	174	116,049	72,191
	1都3県	23	26	34,152	21,978
全日制	全国	4,412	4,161	3,244,052	2,826,224
	1都3県	905	889	797,334	767,671

表は 2010 年度と今年度の比較です。全日制高校は全国も 1 都 3 県も、学校数(分校を含む)、生徒数とも少子化で減少、定時制高校も全国では学校数が減少、1 都 3 県では増えていますが、こちらは公立で全日制から昼間部を含む定時制に転換した学校があったためです。ただ、1 都 3 県でも定

時制高校の生徒数は約三分の二に減っています。しかし、通信制高校は全国では 100 校近い増加、生徒数は 10 万人以上増えていて、率では 55% 増です。1 都 3 県でも学校数は増えていますが、生徒数は 3,683 名、10% 増加ですから、通信制高校の勢いが強いことだけでなく、生徒数の増加が、主として広域通信制高校の増加によってもたらされたもの、ということが出来ます。

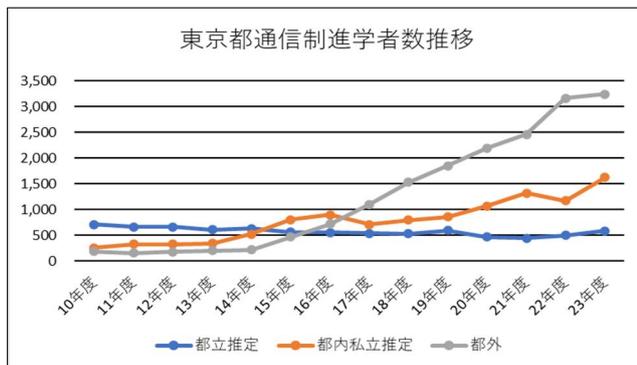


左のグラフは、1 都 3 県の公立中学校(義務教育学校を含む)の卒業生の中で、通信制高校に進学者した人数の推移で、右のグラフは左のグラフを卒業生数で割った進学率の推移です。中学 3 年生の在籍・卒業年度ですので、グラフ右端の 23 年度は今年 3 月の速報値です。千葉県は、本稿作成時点で通信制だけ抜粋した進学者数が公表されていないので空けています。左の進学者数のグラフでは、各都県とも 2010 年度から少しずつ減少または横ばいで推移し、2014 年度～2016 年度から増加傾向に転じて、その後は増加が続きます。この 4 都県の中で神奈川県は 2010 年度にすでに 3,096 名と、他都県、特に生徒数が多い東京都よりも 3 倍近い進学者数になっています。これは、もともと県立通信制進学者が多かったことに加え、県内には以前から「全日型通信制」の私立高校があって、その高校への進学者数が多くを占めているからです。「全日型通信制」は、スクーリングを毎日行うなどで、実質的に全日制と大差ない学校生活の高校で、他の都県にもこうしたコースを設置している高校はありますが、神奈川県ではこうした高校が、高校受験では全日制の私立高校と同列に扱われてきた経緯があります。神奈川県の多さは、右の進学率のグラフでも確認できます。

千葉県は、左のグラフでは 4 都県の中で一番進学者が少ない推移ですが、もともと公立中 3 生徒数が 4 都県の中で一番少ないことが影響しています。ただ、右のグラフでは 2015 年度くらいから他の都県よりも進学率が 1% 程度低い水準が続いていて、他都県の進学率を追いかける動きが続いています。こうした点も進学者数で差がついている理由です。むしろ生徒数最多の東京都が、2019 年度以降は左の進学

者数のグラフでトップになっていますが、それ以前はトップではなかったことが特徴的です。実際、右の進学率のグラフでは2014年度まで1%台が続き、「全日型通信制」が多くを占めていた神奈川県はともかく、埼玉県よりも低い水準が続いていました。ただ、東京都も2015年度から通信制への進学率が目立って上昇してきて、右のグラフのように、2021年度からの3年間は東京都、神奈川県、埼玉県がほぼ変わらない進学率になって、上昇が続いています。

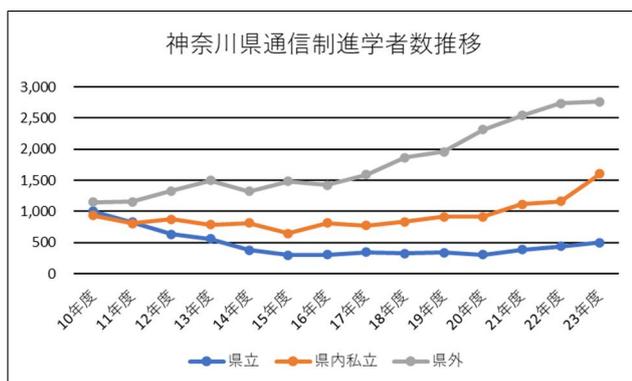
(3) 各都県の県内、県外進学者数の推移



ここからはもう少し詳しく各都県の推移を見ていきます。左のグラフは東京都の公立中学校卒業生の都立通信制、都内私立通信制、都外通信制の進学者数の推移です。東京都からの公表値は都内通信制か都外通信制か、という区分での公表のため、下の注釈のように推定値としています。

都立通信制進学者数は、グラフ左端の2010年度に713名でしたが、徐々に減少し、細かい増減があるものの

2015年度以降は400～500名台が続いています。都外進学者数は公立・私立の合計ですが、他県の動きを見ても、ほとんどが私立の広域通信制です。2015年度から目立って増加し、特に2022年度は大きく増えました。2023年度は増加のペースが下がりましたが、3,240名になっています。都内私立通信制進学者数は2014年度から増加しますが、2017年度は減少します。通信制高校の人気が上がっているものの、都外各校の人気に押されたようです。その後は2022年度を除いて増加が続きますが、2023年度も1,626名と、都外進学者数の約半分の水準で、都外進学者数の増加には追いついていません。N高校のグループだけではありませんが、私立の広域通信制高校の存在感が大きくなっていることがわかります。

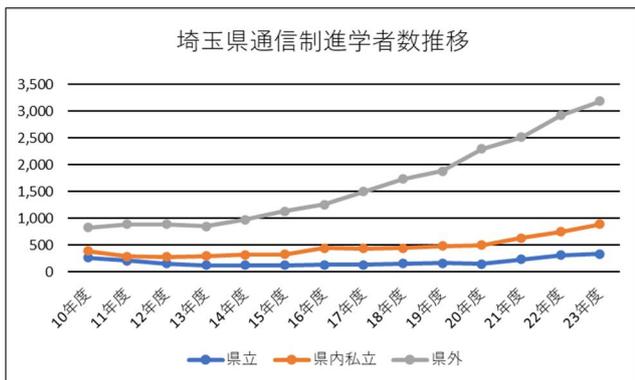


神奈川県ではグラフ左端の2010年度には県立通信制の進学者が1都3県で最多の1,005名でしたが、減少が続いて2015年度～2020年度は300名台の前半が続きます。2021年度から少しずつ増加、2023年度は505名ですが2010年度の約半数です。「全日型通信制」が多い県内私立通信制進学者数は、2010年度には939名で、以後小幅な増減を繰り返しながら2015年度に650名まで減少し

ます。2018年度以降は徐々に増加、2023年度は増加が目立ち、1,602名になりました。県外通信制の増加が刺激になったようで、「全日型通信制」と言いつつ、通学日数の選択の幅を広げるなどの工夫が見られる高校もあります。県外通信制の進学者数は、グラフ左端の2010年度も1,152名と、1都3県では唯一の1,000名超過でした。2016年度まで小幅な増減が続き、2017年度からはグラフのように増加が続

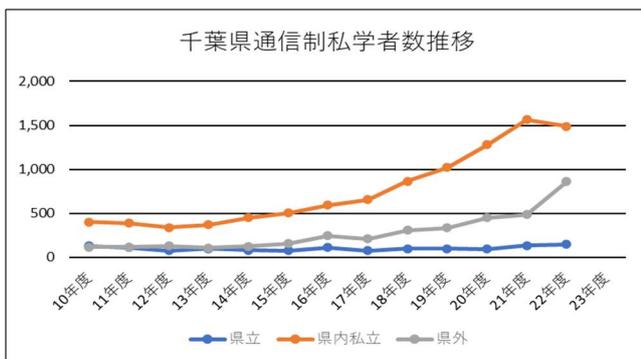
注 東京都立通信制の進学者数は、東京都公表の翌年度の入学者数から作成。過年度の中学卒業生と、私立・国立中学校や他の道府県からの転居者の入学の分が誤差になる。東京都内私立通信制の進学者数は、全日制と同様、隣接県からの入学者がそれなりに考えられることから、東京都から公表されている都内通信制進学者数から、都立の入学者数を差し引いて作成した。なお、学校基本調査でも都内・都外の区別がない。

きます。東京都での広域通信制の人气が影響したようです。2023年度は厳密には前年度よりも増加していますが横ばいです。今後も増加が続くのか注視したいところです。



埼玉県ではグラフ左端の 2010 年度の県立通信制への進学者数は 266 名で、2012 年度～2020 年度は 100 名台が続きました。2021 年度以降は徐々に増加、2023 年度は 336 名になりましたが、率では卒業生の 1%に満たない水準が続いています。県内私立通信制進学者数は、2015 年度までは 200～300 名台が続きました。2016 年度にやや増えるものの、その後も 2020 年度まで 400 名台が続き、

県外通信制進学者数の増加が刺激になっているとは言いきれない状況でした。2021 年度からは少しずつ増加していますが、2023 年度も 892 名と、1,000 名に達していません。県外通信制進学者数は 2010 年度も 830 名と、県立や県内私立通信制よりも多い進学者数でした。2014 年度から増加傾向になり、2020 年度からは増加のペースが少し上がっていて、2023 年度は 3,181 名と、3,000 名を超えました。

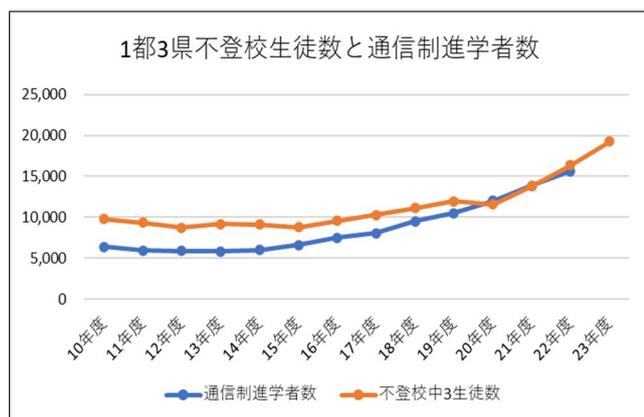


前述のように千葉県では 2023 年度の結果が公表されていません(例年、翌年度末ごろの公表のようです)ので、2022 年度までの結果です。他県のグラフと比較するとわかりますが、1 都 3 県で唯一県外通信制の進学者数が県内私立通信制よりも少なくなっています。県立の通信制はグラフ左端の 2010 年度に 128 名で、2022 年度は 148 名です。

この間、100 名を超えた年もありますが、2 ケタだった年も多く、1 都 3 県で最少の進学者数が続いています。県外通信制進学者数は 2015 年度まで 100 名台が続きました。東京隣接県の地理的な面は神奈川県や埼玉県と同じですが、千葉県ではなかなか県外通信制が中 3 生の進路選択肢にはならなかったことがわかります。本格的に増加が始まったのは 2018 年度からで、2018・19 年度は 300 名台、2020・21 年度は 400 名台ですが、2022 年度は大きく増えて 861 名になりました。県内私立通信制進学者数は、グラフ左端の 2010 年度は 401 名で、2012 年度まで少しずつ減少しましたが、その後は増加に転じ、2018 年度からは増加のペースが上がっています。2021 年度には 1,568 名に増加しましたが、2022 年度は少し減って 1,488 名です。千葉県では、県内私立通信制の存在感が他都県よりも大きく、県外通信制高校への進学者を増やさなかったこととなります。2023 年度は公表されていませんが、県内・県外の動きがどうなっているのか公表が待たれます。

(4) 通信制進学者はなぜ増える

よく、不登校の生徒の進学先は通信制高校などと言われます。次のページのグラフは 1 都 3 県の公立中学校からの通信制高校進学者数と、公立中学校の不登校の中 3 生徒数の推移です。通信制高校進学者数は前項までに紹介した各都県の進学者数の合計です。千葉県からは 2023 年度の数値が公表されていないので、グラフは 2022 年度までです。不登校の生徒数は、各都県から公表されている「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」の値から作成したもので、下の注釈のように一部



に推定値を含みます。

グラフ左端の2010年度は不登校の中3生徒数が9,758名、通信制高校への進学者は6,389名で、2011年以降はどちらもやや減り、横ばいから、通信制高校への進学者数が2014年度から、不登校の中3生徒数は2016年度から増加に転じます。不登校の生徒数は2020年度に少し減りますが、これは長期欠席者の理由に「新型コロナ」の項目が設けられたことが影響しているようです。本来

なら不登校に分類される生徒の中に、新型コロナを理由にしたケースがあったのでしょう。

2020年度からは不登校の中3生徒数と通信制高校進学者数のグラフはほぼ一致しています。両方のグラフが同じような動きをしていますから、不登校の生徒の増加が通信制進学者数の増加に直接結びついていることがわかります。それも、前項の結果から各都県とも公立の通信制高校への進学者数は、やや増えている事例はあるものの目立った増加ではありませんから、私立の通信制高校が、増加する不登校生徒の受け皿になっていることになります。

しかし、不登校だからといって進学先が通信制高校に限られるわけではありません。高校進学という環境の変化で不登校から脱するケースも当然あり、全日制高校にしっかり通う生徒はいます。また、近年は不登校について、メンタルや対人関係、怠惰、学力不振といった面だけでなく、人間の持つ体内時計のリズムや、「若年性起床困難症」として、睡眠学や病的な視点からの研究も進んできました。起立性調節障害や睡眠相後退症候群などで朝早起きが難しくても、各都県の公立高校にある昼間部定時制の午後部なら通学可能なケースも多く、授業のとり方次第で3年間で卒業できるケースも少なくありません。グラフの2019年度までは不登校の生徒数よりも通信制高校の進学者数が少なくなっていますが、2020年度以降も不登校の生徒のうち、それなりの人数は全日制や定時制の高校に進学しているはずで、本来は2020年度以降も両者のグラフにある程度の差がついてもおかしくありません。

2020年度以降の両者のグラフに差が見られないことは、不登校以外の理由で通信制高校に進学する生徒の増加を意味します。通信制高校に在籍する高校生アスリートや、芸能活動、ダンスなどの芸術活動に取り組む生徒が、その生活をSNSで発信していることで、中学生の高校を見る目が変わってきたのでしょう。東京オリンピックに向けての高校生アスリートのトレーニングがSNSで注目されたことがひとつのきっかけになり、コロナ禍でオンライン授業が広がる中で「無理に普通の高校に通学しなくてもよいのでは」という意識が中学生に生まれてきたようです。また、高校卒業は指導要領で74単位以上ですが、多くの全日制高校は90～100単位程度が必修です。74単位で卒業できるなら、減らすことができた時間を他のことに使いたい、こうしたニーズが顕在化したことも通信制高校への進学者の増加に繋がっています。スポーツ、芸能、芸術・創作活動、社会活動など、熱心に取り組みたいことがある生徒には、通信制高校には積極的に取り組める環境がある、と映っているのでしょう。

注 不登校の中3生徒数は、本稿作成時点で東京都の2015年度以前、埼玉県2013年度以前と2023年度、千葉県2020年度がウェブサイトには未掲載で、文部科学省の都県別公立中全体の不登校の生徒数に、全国計公立中の学年別人数比(中3は年によって35.8%～41.4%まで変化)をかけて推定値とした。また、東京都2012年度以前は文部科学省でも国公立合計値のみの公表のため、その値に、2013年度以降の東京都全体の不登校生徒数に占める公立中の割合(平均88.5%)をかけて公立中の不登校生徒数と推定値とした。

この点は、全日制高校にとって、その存在意義が問われていると言えるのではないのでしょうか。スポーツなど、前向きに取り組みたい活動と高校生活を両立させようと考えている「しっかりした生徒」は、「本校に入学してほしい生徒像と合致する」と考える全日制高校は多いでしょう。こうした生徒が、「取り組みたいことにもっと時間を割きたい」として通信制高校を選んでいるのなら、全日制高校にとって損失であり、10年後、20年後、通信制高校から社会的に注目される卒業生が増えてきたときに、全日制高校に与える影響は大きくなるのではないのでしょうか。

●SNニュースレターのお申し込みのご案内

SNニュースレターは学校・塾・出版・教育関係者向けの会員制情報誌です。どうぞお申し込みください。

- (1)発行間隔 年間20回、必要に応じて他に臨時増刊号を配信します。
4月上旬、下旬、5月下旬、6月上旬、下旬、7月上旬、下旬、8月上旬、9月上旬、下旬、10月上旬、下旬、11月上旬、下旬、12月上旬、1月下旬、2月上旬、下旬、3月上旬、下旬の20回
上旬は5日ごろ、下旬は20日ごろ発行
- (2)主な内容 進路希望調査の分析、入試状況の分析、各校の入試変更点の紹介、大手公開模試の状況、特集(学校の取り組みの紹介ほか)など、首都圏の中等教育を中心に、教育情報、入試情報、学校情報を掲載します。
- (3)閲覧・ダウンロード方法 発行すると会員の方にプッシュ通知でお知らせします。別途お知らせするIDとPWを弊社サイトに入力してご覧ください。
- (4)会費 通常年間(4月から翌年3月)3万円+消費税です。年度途中からは割引があります。弊社からメールにてご請求をお送りしますので、お振込みください。お見積書が必要な場合はご遠慮なくご連絡ください。
- (5)お申込み 次のページのお申込にご記入の上、ファックスでお送りいただくか、その内容を「お申込みはこちらからメールで」でよりご送信ください。

SNニュースレター

現在掲載している号

- 2月下旬号・3月上旬号・3月11日臨時増刊号・3月下旬号
お申込書付きサンプル版(発信済みの抜粋)は下の「サンプル版」に掲載しています

閲覧はIDとPWを入力してください。

ログインID	<input type="text" value="01test"/>
パスワード	<input type="password" value="....."/>

SNニュースレター

発行予定 年間20回

- 上半期 4月上旬、下旬、5月下旬、6月上旬、下旬、7月上旬、下旬、8月上旬、9月上旬、下旬
- 下半期 10月上旬、下旬、11月上旬、下旬、12月上旬、1月下旬、2月上旬、下旬、3月上旬、下旬
- 上旬は各月5日ごろ、下旬は20日ごろに発行
価格 通常年間(4月から翌年3月)3万円+税、年度途中からの場合は別途割引

▶

▶

次のページのお申込書をファックスしていただくか、その内容をこちらからメールでお送りください

SNニューズレター2025 年度お申込み

- ① 下の申込書にご記入いただき、ファックスでご送信
- ② 弊社サイトからメールにて下記内容をご送信 どちらでも OK
- ◆ 弊社サイトに「サンプル版」を掲載しております。ご覧ください。

ファックス番号 03(6434)0897 送付状不要

SNニューズレターを申し込みます。 ★は必須項目

★貴校名・塾名・社名	
★ご住所	〒
★お電話番号	
★ご担当者① お名前・ご役職	[ご役職] お名前
★ご担当者① メールアドレス	@
ご担当者② お名前・ご役職	[ご役職] お名前
ご担当者② メールアドレス	@
備考・申し送りがあれば ご記入ください	

●メールアドレスは、毎回発行をお知らせするプッシュ通知で活用するほか、登録時のID・PWのお知らせに使用します。学校、塾等、団体でお申し込みの場合、団体としてのメールアドレスでも構いません。